

正五九とは

昔から成田山へのお参りは、正五九参りといって正月、五月、九月と年に三回お詣りするのが良いとされてきました。これは正五九の月が「三齋月」（さんさいがつ）といわれる月に相当するからです。 仏教発祥の地インドの在家信者は、正月・五月・九月に八つの戒めを守って功德を積む実践行を行なっていました。この風習が中国を経て日本に伝わり、現在正五九参りとして受け継がれたのであります。 【成田山のホームページより】

「正月・五月・九月」の三つの月は他の月とわけて「三齋月」又は「三長月」・「善月」とも言い、この三つの月の間は八齋戒を守って殺生をやめ、非行を謹んで過ごすことが昔から行われていた。『四分律行鈔』という書物によると、正月・五月・九月には、冥界にある人間の善悪の行為を映し出す「業鏡」（ごうきょう）が私たちの住んでいるこの南閻浮提のありさまを照らし出して、そこに行われている良い事と悪い事の全ての行為をこの「業鏡」に映し出して見るのです。

したがって、この「業鏡」が私たちの方に向けられる正月・五月・九月には少しでも悪い事はしないように、またどんなに小さい事でも良い行いをして、「あの世（冥界）」に行った時に苦しまなくてすむようにしようというわけです。

毎月「六齋日」という日があります。 8日・14日・15日・23日・29日・30日の六日間で、この日には①殺生しない②与えられないものはとらない③非行（淫）をしない④嘘はつかない⑤酒をのまない⑥立派な寝床に寝ない⑦香水や身を飾るものをつけない⑧踊りや歌などを見に行ったり楽しんだりしない、という八つの戒め（八齋戒）をし、さらに夜食を食べないということを実行しました。

「業鏡」（ごうきょう）

地獄の閻魔大王の業務用の小道具の一つが業鏡で、閻魔大王の前へ引き出された人の過去がそこへ映し出されるために、いくら言い訳をしても言い逃れることができないとされています。今風に解説すると、業鏡はビデオカメラでしょう。一月五月九月は我々が住んでいる地球を、あの世からビデオカメラにて録画しているのです。

あの世の裁判

私も、まだあの世に行ったことが無いのですが噂によると「人間は死んだ後、善人は極楽で生まれ変わり、極悪人は地獄に落ちる」と言われています。

天国に行くか、地獄に落ちるかは、十王に姿を変えた十人の仏様の裁判で決まるようです。

死後七日目から四十九日目まで、七回の生前の所業（善行、悪行）の審査があり、35日目には、地獄を支配している閻魔大王による、天・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄の六道何れに進むかの裁きが下り、49日目に判決が確定するようです。

人間は、何時かは死ぬが死後遺族や親しい人で追善供養をします。何故供養をするのでしょうか？ 百日目から三十三回忌までは、それぞれの王による再審査が行われるのでその応援が供養です。遺族は、罪を軽くしてもらおう為、故人の為に善行・功德を積み重ねて、お祈りして、追善供養をする。裁判の日の後では、間に合わないから、供養は忌日或いは前に行わなければならない。

又、49日の判決が出される迄は、人の魂は、家の回りを浮遊していると言われている。

しかし、極楽浄土に往生するためには、この世で善行・功德を積み重ねておくことが大切である。せめて正五九だけでも、お参りをしてあの世に行った時に極楽浄土に行ける様にと。

ちょっとせこい考えですね。

極楽浄土に行きたい人は正五九だけでなく、常日頃から信仰心を持ってお参りしておきましょう。

地獄から畜生までを三悪趣と呼称し、これに対し修羅から天上までを三善趣